

オンラインから始まったゼミ ― 仏教学の研究指導を事例として ―

戸次 顕彰

大谷大学文学部講師

筆者の着任初年度となった2020年は、早々に入学式が中止となり、学生のキャンパスへの入構も制限されるなど、歴史に名を残す異常な事態となってしまった。そして授業をオンラインで実施するという、これまで考えたこともない問題に直面し、初めて会う学生と、しかも相手の顔が見えない中でのゼミが始まることになった。

おそらく多くの教員がそうであったように、オンライン授業の可能性とその限界に直面し、大学、そして授業やゼミが、本来何をする場合なのかといった根本的な問いが頭をよぎった。しかし、筆者自身は目前の非常事態に対処するべく、こうした問いとゆつくり向き合うような暇がなかった。また、これから始まる大学での教育・研究およびその他の業務との対峙が大きな課題であったが、ただ時間だ

けが過ぎていった春の状況を思い起こす。

筆者は大学で、文学部の中にある仏教学科という学科に所属している。学科は小規模ではあるが、「仏教学」という学問領域は、古代や中世に著された膨大な仏教文献群を対象とし、それらの読解を研究の中軸とする。筆者は「仏教思想コース」を選択した学生のゼミを担当しており（他のもう一つのコースは「現代仏教コース」がある）、中でも東アジア、あるいは漢字文化圏と呼ばれる中国・韓国（朝鮮）・日本の仏教に関心をもつ学生が集まっている。そのゼミでは、インドから伝来し中国で漢語に翻訳された仏教文献を講読している。

そして今、着任2年目となる2021年度が始まった。感染状況は予断を許さないが、対面でゼミを実施できることに喜びを感じている。ゼミの学生たちは第4学年へと進み、卒業論文のテーマを決めなければならない時期が到来した。「仏教学科」という名称から、多くの学生が寺院出身者であるかという点、実はそうでもない。一般企業への就職を目指している学生、資格の取得に励みつつ仏教を学ぶ学生など多様である。将来、必ずしも仏教関係の職業に就かない学生にとっても、自ら問いを立て、そしてそれ

を解決していき、文章化するという論文提出までの営みは、社会に出てからも必要なことであることを学生に強調する必要がある。

そうした学生の卒業論文のテーマについても多岐にわたるわけである。論文の執筆に際しては、学生一人一人がエンジンになつてもらわなければいけないので、まずは学生の興味・関心に基づいてテーマを設定してほしいと思っている。ただし、やりたいこととできることは違うということもある。こちらは方法論を想定しながら、範囲を限定してもらう、あるいは逆にテーマを広げてもらうなど、学生と相談して、意向を聞きつつ調整していかねばならない。

先に述べたように、仏教学はまず文献研究に軸足が置かれる。しかし学生の多彩な関心領域を前にして、常にその学問的常識が通用しないということもある。「何をどのように研究していくのか」というテーマ決定に際する基本的な課題についても、「何を」という点については学生に考えてもらわなければ先に進まない。こちらは、同時に「どのように」に思考をめぐらすことになる。

自分の関心の所在が明確ではない学生でも、どうしようかと悩んでいると時間だけが無駄に過ぎてしまう。とに

かく準備を進めてほしいという意味で、参考文献の紹介などをするわけだが、それが学生のやりたいことと常に一致するとは限らない。とにかく何か準備を始めるように指示しつつ、うまくいかなかった場合の対処法も講じなければならぬ。

新任・コロナ・オンラインという特別な事情が重なり、ゼミ生一人一人の学修状況から人柄に至るまで十分に把握できなかった中で、卒論のテーマ設定から、執筆・完成に向けて指導することに困難を多く感じている。しかし、こうした中でも、ゼミ本来の意義を考え直すことができたことだけが収穫だったかもしれない。

講読においても、授業においても、ふだん険しい顔をしている学生が、にっこり微笑む瞬間がある。下を向いて別のことをしていたり、寝ていたりする学生でも、ある話のときは私の顔を見てうなずきながら耳を傾けることもある。人間の生き方やものの見方・考え方に関わる「仏教」でも、いわゆる社会的実用とは無関係とみなされる。そうした学問に興味をもってもらうための工夫は、対面による学生の機微によって教員は学んでいくものであるということとをあらためて痛感する。

京都精華大学メディア表現学部 ・ 吉川 昌孝「メディア表現学部学部長」

新しい価値を創造し、社会課題の解決に挑む

はじめに

2021年4月、京都精華大学に2つの新学部が誕生した。グローバル化する世界を体験して学ぶ「国際文化学部」と、テクノロジーを駆使して新しい表現を追求する「メディア表現学部」である。これによって、本学は芸術学部・デザイン学部・マンガ学部を含めた5学部体制となった。本稿では、メディア表現学部が設置された背景や、その特徴について説明したい。

1 設置の背景

京都精華大学は、1968年に短期大学として創立さ

れた。当時は美術科と英語英文科があり、以後学部・学科の新增設や改組を重ねながら、「表現の大学」としての歩みを進めてきた。2006年には、マンガの教育や研究を行う日本初の「マンガ学部」を設置するなど、学問領域の創造や発展にも注力している。

創立50周年を迎えた2018年、大学は2024年度を到達点とする「VISION 2024SEIKA」を発表した。そこでは、表現・リベラルアーツ・グローバルの3つが立体的に統合した大学像を構想し、「表現で世界を変える」というスローガンを掲げている。そして、中期計画には、次の50年を展望した学部・学科の再編計画が盛り込まれた。国際文化学部とメディア表現学部は、この計画によって設置されたものである。

さて、短期大学として出発した本学が5学部編成の総合大学へと発展したように、世の中も半世紀で大きく変化した。高度経済成長の只中だったわが国は、少子高齢化、地域の過疎化、エネルギー自給率の低さなどの諸問題を抱え、今では課題先進国といわれている。国際社会では、深刻化する地球規模の課題を解決するための「持続可能な開発目標(SDGs)」が2015年に合意された。近代から続く合理的・個人主義的なわれわれの生き方および社会のあり方には、いよいよ限界が訪れようとしている。

初等中等および高等教育の現場には、こうして行き詰まった状況を打破する人の育成が求められている。では、そのような変革を可能にする力とは何か。ひとつは、グローバルな視点とローカルな視点をもって社会的な課題を理解し、自ら解決策を講じて実行する力ではないか。国際文化学部は、そのような力を育むことを目的に生まれた学部である。もうひとつ、変革の原動力として期待されるのは、デジタル技術を活用する力であろう。政府は、社会の諸問題をデジタル技術で解決するための国家戦略として「Society 5.0」を掲げている。彼らがめざすのは、

人ともものをつなぐIOTによってあらゆる情報が共有される社会、AIで必要な情報が必要なきに提供される社会、それによって少子高齢化や貧富の差などの課題が解決される社会だ。情報を運ぶ媒体たるメディアを研究対象とするメディア表現学部は、この分野の期待に応えようとする学部である。

昨今はあらゆるものがメディア化している。テレビやスマートフォンのみならず、家電、自動車、日用品も情報を運ぶ媒体になる。メディアを利用した新しいサービスやコンテンツはここ10年で数えきれないほど生まれた。しかも、いまだそれは発展途上にある。拡張性に富むメディアは、教育、医療、都市設計、経済、娯楽など、あらゆる領域の進化と発展に寄与する可能性を秘めている。今後、人々の暮らしや価値観を一変させるような、誰も経験したことがない何かが生まれるだろう。そのような未来を見据えて、メディア表現学部は、メディアを駆使して新しい社会を創造する人の育成をめざす。なお、本学部はメディアを研究するだけの学部ではなく、メディアを使った表現に取り組む学部である。表現の大学として培った教育実績を生かし、在学中からメディアを使って表現するこ

と、また、それによって社会を変革することに挑戦する。

2 学部の特徴 1…概要

学部のあり方を端的に表すものとして、ディプロマポリシーの一部を引用する。「メディア表現学部の教育研究目的は、変化し続ける科学技術と社会が抱える課題の解決に表現を通して寄与できる人間の育成です。メディアと情報技術に関する広範な知識と専門的な表現技能を教授し、コンテンツの制作やメディア、プラットフォームの設計によって新しい価値を創造できる力を養います」。前述の通り、本学部では、作品を制作して発表するだけでなく、それによって何らかの社会課題を解決することをめざす。したがって、ものづくりの知識と技術を得る機会だけでなく、社会に働きかけるための知識と技術を得る機会も設ける。この点は、学部の特徴を表す重要な要素のひとつである。

学部は1学科3専攻からなる。メディア表現学科のもと、プログラミング技術を応用して社会課題の解決につながる「メディア情報専攻」、VRやARなど視覚を中心

としたコンテンツ制作に取り組む「イメージ表現専攻」、音楽や音響など聴覚を中心としたコンテンツ制作に取り組む「音楽表現専攻」がある。

3 学部の特徴 2…カリキュラム・授業

カリキュラムや授業の特徴について、ここでは4つの項目について説明したい。(1)専攻と学び方、(2)アクティブラーニング、(3)プログラミング、(4)社会実践、である。

(1) 専攻と学び方

学生が専攻を選ぶのは2年次からである。1年次は3専攻の専門領域を幅広く学び、所属する専攻を検討する期間とする。ただし、専攻を選んだ後も他専攻の科目を履修できる仕組みにした。メディア表現とは、技術のみ、音楽のみ、映像のみで成り立つものではない。さまざまなリソースを組み合わせて実現されるものである。多彩な分野を学べる環境で、自らの志向と目標を発見し、目標達成に必要な知識と技術を自由に選んで身につける。そのような学び方が可能になる環境をめざした。

(2) アクティブラーニング

プロジェクト型・ワークショップ形式の授業を多数設けている。理想は、技術、音楽、映像など、さまざまな得意分野をもつ学生が専攻をこえてチームを組み、協力して問題解決に当たるスタイルである。これによって、多彩な領域の人・知識・機能を結集させて、何かをつくりあげる経験を積んでもらいたい。なお、アクティブラーニングの授業においては、学生たちの能動的な学びや活動が特に重視される。その際、教員は、学びや活動をサポートするアドバイザーの役割を担うことが望まれる。

(3) プログラミング

2020年度より小学校でプログラミング教育が必修化した。今後はプログラミングが基本リテラシーのひとつになるだろう。もとより、デジタル化が広がるこれらの世の中でメディア表現を行うならば、プログラミングの知識と技術は不可欠である。本学部では『プログラミング』を必修科目として、1年次に全学部生が履修するようにカリキュラムを組んだ。この授業ではロボットやデジタルガジェットを使いながらPython、

JavaScriptなどのプログラミング言語の基礎を学ぶことができる。

(4) 社会実践

必修科目として、2年次に『インターンシップ』、3年次に『社会実践実習』を設ける。前者は、企業で就労体験を行うことで、自分の力を社会に役立てる喜び、仕事の仕組み、現場が抱える課題などについて知るものである。後者は、企業と連携して商品開発に取り組むなどして、メディア表現によって実際の課題解決に挑戦するものである。京都精華大学は全学部において社会実践教育を重視しているが、メディア表現学部は特にその傾向が強い。それは、メディアそのもののインタラクティブな特徴に起因する。メディアとは、情報を発信し、受け手のフィードバックを得、それによって変化し続ける存在である。すなわち、メディア表現の実践的な学びには、受け手と対話する機会、結果に応じて新たな表現を模索する機会、それらを繰り返し学ぶ機会が欠かせない。社会と関わって学ぶ場は、可能であれば、必修科目以外にも設けていきたいと考えている。

4 学部の特徴 3 教員

本学部には、客員教授も含めて約15名の教員が在籍する。他学部と同様、現役のアーティストや実務家教員が多い点が特色である。教員の専門分野・活動実績・国籍は多岐にわたり、学生の幅広い関心に応えることが可能だ。次に、教員の一部を紹介する。

「メディア情報専攻」

松村慎は、プログラミング教育事業などを手がける企業の経営者である。ゼミのテーマは「日本と海外を結ぶウェブサービスの企画、開発」。海外の開発チームとの協働や、外国人向けのサービス開発などを計画している。戸田康太は、文化芸術の振興や普及に取り組んだ経歴があり、文化政策やマンガ研究を専門分野としている。ゼミでは、メディア芸術への理解を深め、その魅力を伝える展覧会やイベントなどの企画に取り組む。

「イメージ表現専攻」

ucnvは、プログラマー兼アーティストとして国内外で展示やパフォーマンスを行っている。ゼミのテーマはメディア

アート。コンピュータを用いた芸術についての理解を深める。伊藤ガビンは、雑誌、ゲーム、現代美術作品など、さまざまな媒体のディレクションを手がける編集者である。ゼミのテーマは、「新しいメディアや表現手法と、それを最大限に生かしたコンテンツを同時につくる」および「表現ジャンルそのものをつくる」としている。

「音楽表現専攻」

落見子は、フィジカルコンピューティングパフォーマンスやサウンドインスタレーションの制作などを手がけるアーティストである。ゼミではコンピュータ音楽について学び、これまでにない音の創造に挑戦する。安田昌弘は、主に日本とフランスの音楽産業について比較研究しており、京都の音楽シーンやフランスにおける日本のポピュラーカルチャー事情に詳しい。ゼミではインターネットを介した多文化音楽フェスの実現をめざす。

「客員教授」

客員教授には、テクノロジーを駆使したライブ演出や商業施設の建設企画などを手がける黒田貴泰氏、ICTに対する消費者動向を世界規模で研究するミカエル・ビオルン氏、日本のポップカルチャーを研究するかたわ

ら新しい音楽の感覚を制作するイアン・コンドリー氏を迎えている。

5 学部の特徴 4…他学部との連携

現時点では構想の段階だが、ゆくゆくは他学部との連携授業を実現したい。また、学外の企業や団体、他大学と協力するプログラムも計画している。革新的なアイデアとは、多様性の中で生まれるものである。新しい価値の創造をめざす本学部にとっては、芸術系・文系・理系の思考、さまざまな国の習慣や文化、いろいろな立場の人が交差する環境こそが理想的な学びの場に違いない。知識や技術を身につける機会だけでなく、広い世界に触れ、そこで実践を重ねる機会を設け、幅広い領域でイノベーションを起こす力を養いたいと考えている。

おわりに

以上、メディア表現学部が設立した背景とその特徴について簡単に説明した。表現の大学として歩んできた京都

精華大学の土壌を生かしつつ、本学として未踏の分野に挑戦し、他学部の可能性をも広げる教育研究活動を行うことが、われわれの使命であると捉えている。動き出したばかりではあるが、各所の協力を得ながら学部の発展をめざしていきたい。また、本学部で4年間を過ごす学生たちには、ここでメディア表現に関する知識と技能、デザイン思考とアート思考などを身につけて、卒業後にその力を活用してさまざまな課題を解決し、より良い社会づくりに貢献してほしいと願っている。

新型コロナウイルス感染症の影響で、今なお例年通りの教育や研究が難しい状況が続いている。しかし、感染拡大の渦中にWeb会議サービスや音声SNSが注目を集めたように、コロナ禍を機に誕生・定着したコンテンツやサービスは少なくない。目の前にあるこうした社会課題こそ、新しい価値を創造するきっかけと捉え、学生たちとともに表現を通して解決する手立てを考えていきたい。